

# 選考をふりかえって

「小説部門」中学生の部 選考長 林 真理子

岡本理江さんの「城の中」はぞっとします。それは嫌な感じのぞっとではなく、あまりにも真実をとらえているから。

大人のプロの作家でも、こんなに人の心を動かす小説は書けるものではありません。死後の世界の中で、少女は王になっています。どうして王なのか。それはかつて彼女が学校の中のカーストを受け入れていたから。そしてカーストの下の者たちから受けたいじめを、このうえない屈辱と感じていたから。つまり彼女は、自分が持っていた偏見と傲慢のために城に閉じ込められているのです。

いじめを扱ったテーマの小説で、こんな風な形をとったものは見たことがありません。本当に素晴らしい発想です。

江島果乃美さんの「緑の水槽で君は」も、とてもいい作品ですね。転校生との友情の物語ですが、最初のメダカの水をかえるシーンがとてもしきいきとしています。二人でジャムをつくるシーンは、やや少女っぽいかなと感じましたが、現代の男の子たちはふつうに料理をするかもしれません。

そして二人で手をつないでいたら、ウサギを抱いた時を思い出すところも、とても素敵です。友情という心の触れ合いは、確かに温かい生きものを抱いているのと同じなんでしょうね。

勝田琴美さんの「鍵屋の戯れ」は、ちよつとシニールで怖いお話です。少年が異次元へ行こうと思ったばかりに自滅するストーリーは、ちよつとゲームみたいですね。だけどこのお話はゲームとは違い、それぞれの人がたちがともうまく描かれています。好奇心いっぱいの少年たちの描写はともりアリティがあります。鍵屋の主人はふつうの明るい人のようにだけど不気味で、何が始まるんだろう、大丈夫かしら、とドキドキさせる書き方は本当にうまくてびびくりしました。